

# 大妻学院における手芸教育の研究

Study of handicraft education in Otsuma Gakuin

卜部 夏菜子  
Kanako Urabe

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード：手芸，大妻コタカ，女子教育

Key words : Handicraft, Kotaka Otsuma, Women's education

## 1. 研究目的

大妻女子大学は創立から110年を超えた伝統ある女子大学である。その前身となるものは、大妻コタカが1908年に始めた裁縫や手芸の私塾である。また、大妻コタカは一般婦人向けに裁縫や手芸に関する書籍を多く執筆し、一部は学校の教科書として使用されていた。教科書で紹介されている作品は非常に繊細であり、高度な技術を要するものも多くみられる。

現在、大妻女子大学博物館には卒業生らが制作したとみられる多くの作品が収蔵されている。これらは大妻での裁縫・手芸教育を象徴する重要な資料であるが、制作時期や授業内容との関連など、明らかにされていない部分が多いという現状がある。

山崎明子によれば『近代日本の「手芸」とジェンダー』（2005）では、手芸は教育制度によって確立され、当初は「家庭生活全般の手仕事」を意味していたが、制度の改正によって現在の概念に近づいていったと明らかにしている。

これらのことより、裁縫・手芸教育の伝統校である大妻の教育を研究することによって、手芸文化の変遷を捉えることができるのではないかと考えた。

近年では「オリジナリティのある一点もの」を求める人が多く、オンラインのハンドメイドマーケットは賑わいを見せている。刺繍や編物など手芸技術を用いた作品も多く売買されており、手芸に関心を持つ若者が増えていると考える。このような状況で過去の手芸技術を取り入れることにより、今後の手芸文化がより発展していくのではないかと考えた。本研究では過去の手芸文化の中から大妻の手芸教育の詳細な内容を明らかにするこ

とを目的とする。

## 2. 研究実施内容

まず、大妻女子大学の前身となる大妻技芸学校などでの手芸教育の実態を明らかにするため、当時の教員や学生たちが寄稿している記事を見ることができる同窓会誌『白ゆ里』（1921~1944）23冊と『ふるさと』（1933~1939）23冊を用いた。『白ゆ里』の記事からは年に一度展覧会やバザーが行われており、学生たちが制作した刺繍やレースなどの手芸作品が展示・販売されていたことが分かった。『ふるさと』には卒業生からの記事が掲載されており、卒業後に教員として働いていた人が多数存在したことが判明した。

また当時のカリキュラムや学科の変遷などを、本学の歴史が述べられている『大妻学校の過去と現在』（1926）や『大妻学院八十年史』（1989）を用いて調査した。大妻は創立以来、学科などが何度も増減や変化を繰り返していた。詳細を見ると、教員を目指す人のために高等科や高等女学校を、働きながら学びたい人のために夜間部を設置するほか、土日に講習会などを行っていた。各自のペースで学ぶ事ができ、個人教授を行っていることも強みとしていた。上記の同窓会誌にはこれらの科に通っていた学生からの寄稿文が掲載されており、学びたい人々のニーズに合った教育を行っていたことがうかがえる。

次に、カリキュラムや文章からは見えない教育の実態を明らかにするため、大妻女子大学博物館の収蔵品調査を行った。卒業生から寄贈された収蔵品は、昭和時代に使われていた授業プリントと作品がほとんどであり、中にはプリントと対応した作品もあった。卒業生らの在籍期間や卒業学科

は様々であり、それぞれの特徴が見られた。

授業プリントには学校、学科名や大妻の教員が制作したことが記載されており、本学独自の物が使用されていたことが分かった。一般の書籍より図が多く、一つ一つの工程が非常に細かく丁寧に解説されていた。

所蔵資料には現代ではあまり見られない作品や道具などがあり、人気の手芸技法や需要のあった作品は現代とは異なることが分かった。高度な染色や刺繍を施した作品が多い上に、一人当たりの作品数も多い事から、実践的な授業が行われていたと推測できる。ただしその難易度は学科によって異なり、勉学が重視されたとみられる高等女学校では、実技科目は基礎的なことから指導が行われていたとみられる。

大妻開学当時に一般の人々は「手芸」をどのようにとらえていたのか明らかにするため、手芸に関する出版物を国立国会図書館オンライン上で調査した。当時は書籍や雑誌が手芸を伝える媒体として最も大きな役割を果たしており、特に雑誌には一般の人がどのような手芸を求めているのか、流行や世相が表れていると考えた。そこで「手芸」という言葉が学制で初めて使われた1872年から1930年までに出版された、手芸に関する雑誌・書籍の発行数を発行年ごとにまとめグラフにした(図1)。

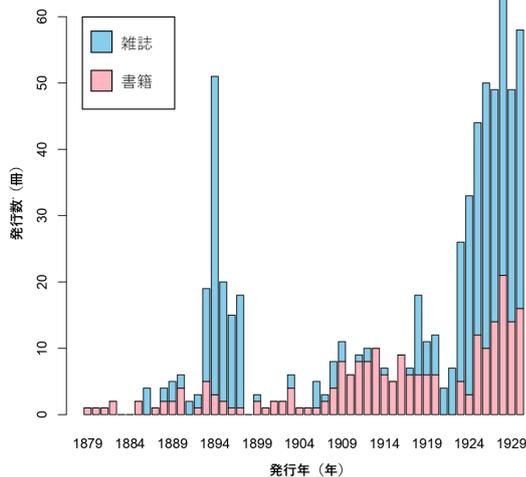


図1. 国会図書館オンラインに収録されている手芸関連雑誌・書籍の発行数

最も古いものは学制発布から7年後の1879年のものであった。人々は「手芸」という言葉に馴染みがなく、一般に認識され使われるようになるまでは時間がかかったと考えられる。この事は出版物の少なさやその内容からも読み取れる。

大妻コタカが私塾を始めた1908年前後から手芸関連の書籍の出版数が増え、中でも教科書など教育関係の書籍や『家庭宝鑑』(1915)や『婦人宝鑑』(1923)といった一般婦人向けの宝鑑が多く発行されていた。料理、洗濯、裁縫や礼法と並んで手芸が取り上げられており、当時の女性にとって手芸技術は必要不可欠であったと考える。1923年以降は書籍、雑誌共に数が増加していく。特に一般婦人向けの月刊雑誌は数多く発行されており、中には大妻コタカが執筆している記事も見られた。社会全体で手芸の需要が高くなっていったことが見受けられる。

### 3. まとめと今後の課題

同窓会誌や大妻に関する資料から、大妻には学生の能力や状況に配慮したさまざまな学科が設置されており、多くの学生たちの需要を満たしていたことが明らかになった。日々の手芸教育の成果は展覧会やバザーで発表され、その評判の良さから定期的な講習会では全国から参加者が集まっていたという。大妻の教育は個人教授を強みとしており、特に教員養成を行っていた学科では、非常に細やかな指導がされていたことが卒業生の授業プリントや作品から読み取れた。手芸の重要性を理解していた大妻コタカは学校以外での教育にも積極的であった。だからこそ、今後手芸を広めていく存在になる教員の育成に力を入れていたのではないかと考える。

調査した卒業生からの寄贈品は、学生数増加によって学科数やカリキュラムが変化をし続けていた昭和前期のものが多くみられた。この時期は手芸関連の出版物、特に婦人向け雑誌の発行数が増加している時期に当たり、手芸文化が著しく発展を遂げていたとみられる。万人に開かれた教育を行っていたことで今日まで続く大きな学校になっていったことは、大妻の強みと言えるだろう。今後は当時の出版物の内容、作品の種類や技法などをより詳しく分析し、戦前の手芸とはどのようなものであったのか、その特長を明らかにしていく。